

堀達之助編・堀越亀之助増補『改正増補英和对訳袖珍辞書』の 異版刷同定をめぐる新たな手がかり

村端五郎

New Clues for Identifying the Edition and Issue Numbers of *A Pocket Dictionary of the English and Japanese Language* Compiled by Hori Tatsnoskay and Revised and Enlarged by Horikosi Kamenoskay

Goro MURAHATA

Abstract

The aim of this paper is to discuss new clues for identifying the edition and issue numbers of the English-Japanese bilingual dictionary titled *Kaisei Zoho Eiwa Taiyaku Shuchin Jisho* (*A Pocket Dictionary of the English and Japanese Language* [sic]) revised and enlarged by Horikosi Kamenoskay. Its first edition compiled by Hori Tatsnoskay was substantially the first printed English-Japanese bilingual dictionary published in Yedo (Tokyo) in 1862. It has widely been recognized that different editions and issues of this historically important dictionary were published during the period from the second year of Keio (1866) to the second year of Meiji (1869). However, English linguists have difficulties in deciding the edition/issue number of the revised dictionaries. A number of studies have tried to find every single clue for the identification such as differences in the content of the title page, the publisher's red stamps, imprints at the back and translation equivalents, misplaced pages, and spelling mistakes. Though there is now a certain agreement that there are two editions, the first edition published in 1862 and the second revised edition in 1866 and at least three issues of the revised edition, there are still many copies left unidentified particularly those published in later years. In this paper, we first review preceding research findings and then discuss some clues, including newly found clues by the present author such as the shape of brush strokes for kanji in the dictionaries, which make a great contribution to identify the edition/issue of the dictionary.

キーワード：『改正増補英和对訳袖珍辞書』、異版刷同定、判別手がかり

¹ 辞書の英語タイトルにある 'Language' は、正しくは 'Languages' とすべきであるが、原本にある表記のままとした。また、編者（堀達之助）及び増補者（堀越亀之助）の氏名の英語表記は、辞書巻頭にある Preface によった。

1. はじめに

堀達之助編『英和对訳袖珍辞書』(A Pocket Dictionary of the English and Japanese Language [sic]、文久2(1862)年成立、洋書調所刊、以下『袖珍辞書』と呼ぶ)は、徳川幕府が欧米諸国と通行条約を結び、急激に英語が隆興するに至り、英和对訳辞書の必要をもって世に出た(石井, 1927)、わが国発の英和对訳辞書と称される(荒木, 1931; 勝俣, 1921)。本論の目的は、その再版である慶応2(1866)年から明治2(1868)年にかけて刊行された堀達之助編・堀越亀之助増補『改正増補英和对訳袖珍辞書』(以下『改正増補』と呼ぶ)の異なる版刷タイプと各版刷同定の新たな手がかりについて論じることである²。『袖珍辞書』は、江戸幕府の官立機関である洋書調所が国内初の印刷による本格的な英和辞書として発行(開板)したものである(勝俣, 1914a, p. 19; 竹村, 1933, p. 34)。初版は200部頒布されたが、なお需要が高まったため、その後開成所と改称した幕府機関(旧洋書調所)は初版の誤りの訂正と若干の増補を施した『改正増補』を慶応2(1866)年に1,000部刊行した(勝俣, 1914b, p. 56)。この再版初刷もたちまち売り切れたため、さらに刷を重ね再版は少なくとも3刷、すなわち慶応2(1866)年再版、慶応3(1867)年再版(2異種)、扉に「慶応三年江戸再版」とあるが実質的には明治2(1869)年に刊行された明治2年再版(2異種)が刊行されたと考えられてきた(豊田, 1939, p. 30; 杉本, 1980, p. 17)。しかし、その後、新たな乱調(丁)ミスの特徴をもつ『改正増補』が次々と発見され、慶応2年再版を含め、『改正増補』には更に数種の変種が存在する可能性が指摘されるなど(鈴木, 1975; 杉本, 1999; 三好, 2010a)、『改正増補』の刊行過程はより複雑化の様相を呈している。そのため、より広範で精度を上げた版刷異変の同定考察が求められる。

版刷同定の最も重要な手がかりとなるのは扉表記と朱印と奥書(刊記)である。しかし、刊行から150年以上も経過すると、それらの手がかりを亡失したものも多く、判別は必ずしも容易ではない。したがって、料紙や刷綴様式、蔵版元を示す朱印、訳語訂正、頁段等の乱調(丁)、綴りミス、筆字体など、あらゆる特徴を詳細に検討して行く必要がある。本論の目的は、筆者が新たに発見した4つの手がかりを示し、それらによりたとえ奥付等が欠損していてもかなり高い精度で版刷同定を行うことが可能であることを示す。可能な限り実見による調査、すなわち、所蔵先に直接出向いての辞書現物調査を進めた。研究者の中には、所在の確認後にファックスや書状を所蔵元に送付して主な特徴の有無を確認するという手法を取る者もいるが、そのような調査では重要な手がかりを見落とししたり、これまで誰も気づかなかった特徴や印刷上の手がかり等を見逃したりする危険性があるからである。

2. 先行研究

勝俣論考(1914a, b)は、わが国最初の『英和对訳袖珍辞書』研究と言ってよい(杉本, 1999, p. 480)。その論考には重要な内容が含まれているので、少し長くなるが『改正増補』についての記述を以下に引用する(勝俣, 1914b, p. 56)。

「開成所字書」の初版即ち文久版は僅に二百部しか印刷したかつたのであるから忽ち売

² わが国の英学史や英語教育史におけるこの辞書の意義等については村端(2002a, b; 2004)を参照されたい。

切れとなり五年後の慶応二年に再版が発行された。この再版の訂正者は堀越愛国翁で今に存命され板橋在志村の村居に悠々自適余生を送られて居る。本年八十歳の高齢者である。訂正に当られたのは翁が開成所の教官をせられて居た時で翁の直話に依ると改刻に入費を多く費(か)けたくないから余り手を入れぬやうにとの註文で一頁に一二個所の割合で訂正を加へたのださうである。当時幕府の金庫は大分疲弊して居たのでこの有用な出版事業にさへ十分の支出を惜んだのである。訂正再版といふのは初版の板木に改正の個所丈填木をしたのである。博物学に関する訳語の改正等に就ては同僚の柳川春三、田中芳男氏(現貴族院議員)等が大分助力されたさうだ。この再版は千部印刷をしたが諸方から前約があつて出版間もなく絶版となつてしまつた。そこで開成所へ御出入の材木商蔵田屋清右衛門といふ人が許を得て全部木板にして慶応三年に売出し大分儲けたさうだ。開成所版は再版も初版と同じく鳥の子両面摺になつて居るが蔵田版の方は用紙が美濃紙と薄葉二通になつてゐる。勿論どつちも片面摺である。初版再版共に刊行部数が少いのと一方では英語研究が旭日の勢を以て日に日に盛になつたので最初二両程であつたが「開成所字書」が後には十両廿両といふ高価で転売されるやうになつた。

新陳代謝の頻繁な新日本の初期のことであるから「開成所字書」はやがて其尽くすべき役目を果し一時は学者の宝典として珍重された「枕字書」も数年の後不用にたつたのであたら潰されて紙屑屋の手に渡り紙として使はれ又は今日古電話帳が使はれるように八百屋等の店売覚帳として用ゐられた為今日では大分品少になつて居る。蔵田版の方はまだ折々古本屋で見ることがあるが慶応二年版殊に文久の初版になると極めて稀である。

勝俣によるこの論考は、再版(増補)刊行に関わつた堀越翁(亀之助)に直接聞いた話としてまとめた内容が含まれているので、『改正増補』刊行に至るまでの状況やその特徴に関してかなり信頼性の高い情報を提供するものである。重要な点をまとめると以下の2点となるだろう。

- 1) 開成所は³、文久2(1862)年に初版を200部刊行したが、高まる需要を満たすため、経費を押さえて、初版の板木を再利用し、柳川春三や田中芳男らの助力により1頁につき1、2箇所程度の割合で博物学関連語などの訳語改正(填木)を加えて慶応2(1866)年に再版1,000部を刊行した。文久2年初版・慶応2年再版いずれも料紙は「鳥の子」で刷様式は「両面刷」である。
- 2) 慶応2年再版もたちまち絶版となつたため、翌慶応3(1867)年に開成所へ出入りしていた木材商の蔵田屋清右衛門が幕府の許可を得てすべて木版にして慶応3年再版を刊行した。この版の刷様式はいずれも「片面刷」で、料紙は「薄葉」の本と「美濃紙」の本の2種がある。

1頁につき1、2箇所程度の割合で訳語改正を行ったとされている。そこで、初版『袖珍辞書』と再版『改正増補』それぞれのA項の冒頭部(1p)の訳語を実見で比較してみた(表1)。

³ 初版刊行時、幕府の機関名は、正確に言えば「洋書調所」である。

表1 A 項冒頭部の初版『袖珍辞書』と再版『改正増補』の訳語比較

原語	文久 2 (1862) 年初版『袖珍辞書』	慶応 2 (1866) 年再版『改正増補』
A, an, <i>art.</i>	不定冠辞ニシテ单称名詞ノ前ニ在テ 一ツ又ハ或ルノ意ヲ示ス	不定冠辞ニシテ单称名詞ノ前ニ在テ 一ツ又ハ或ルノ意ヲ示ス
so much a week.	一週ノ間	一週ノ間
so much a head.	一人ダケ	一人ダケ
A. B. (<i>Abbrev. for Artium. Baccalaurcus</i>)	学校ニテ最初ノ官職ヲ得タル人	学校ニテ最初ノ官職ヲ得タル人
Aback, <i>adv.</i>	後ニ、後ニ返リテ	後ニ、後ニ返リテ
Abactor, <i>s.</i>	食用ニナル獸ヲ盗ム人	食用ニナル獸ヲ盗ム人
Abacus, <i>s.</i>	箒盤、柱ノ上部ヲ蔽フ物	箒盤、柱ノ上部ヲ蔽フ物
Abaft, <i>adv.</i>	後ニ	後ニ
Abaisance, <i>s.</i>	礼ヲスル長頭又腰ヲ屈メルヲ	礼ヲスル長頭又腰ヲ屈メルヲ
Abalienate ^{ed} -ing, <i>v. a.</i>	人手ニ渡ス	人手ニ渡ス
Abalienation, <i>s.</i>	人手ニ渡スヲ	人手ニ渡スヲ
Abandon ^{ed} -ing, <i>v. a.</i>	渡ス、見放ス、捨ル、任セル、移ル	渡ス、見放ス、捨ル、任セル
To abandon one's self to.	己レカ身ヲ任カセル	己レカ身ヲ任カセル
Abandoned, <i>adj.</i>	見捨ラレタル、退ケラレタル、任セラレタル、腐レタル	見捨ラレタル、退ケラレタル、任セラレタル、腐レタル
Abandoner, <i>s.</i>	見捨ル人	見捨ル人
Abandoning, <i>s.</i>	退去	退去
Abandonment, <i>s.</i>	見捨ル事、退去	見捨ル事、退去
Abannition, <i>s.</i>	追ヒ拂フヲ	追ヒ拂フヲ
Abarticulation, <i>s.</i>	骨組ミ	骨組ミ
Abase ^{ed} -ing, <i>v. a.</i>	見下ゲル	下ゲル
Abasement, <i>s.</i>	見下ゲルヲ	下ゲルヲ
Abash ^{ed} -ing, <i>v. a.</i>	恥サセル、困ラセル	恥サセル、困ラセル
Abashment, <i>s.</i>	困ルヲ	困ルヲ
Abate ^{ed} -ing, <i>v. a.</i>	減スル、見下ケル、減シサセル	減スル
Abatement, <i>s.</i>	減スルヲ、真下ケ	減スルヲ、真下ケ
Abater, <i>s.</i>	衰ヘサセル人又物、減少スル人	衰ヘサセル人又物、減少スル人
Abature, <i>s.</i>	跡形足又ハ車輪等ノ跡形ヲ云フ	鹿ノ跡形
Abb, <i>s.</i>	毛ヲ剪ムヲ	剪ニタル毛羊杯ノ
Abbacy, <i>s. pl.</i>	僧ノ位	僧ノ位
Abbess, <i>s.</i>	尼寺ノ頭	尼寺ノ頭
Abbey, Abby, <i>s.</i>	僧ノ支配ノ境内	寺院
Abbey-lubber, <i>s.</i>	不精ナル僧	不精ナル僧
Abbot, <i>s.</i>	僧ノ名	僧ノ名
Abbotship, <i>s.</i>	僧ノ位	僧ノ位
Abreuvoir, <i>s.</i>	畜ノ水飲場、石ノ間ノツナギ泥水エノ語	畜ノ水飲場、石ノ間ノツナギ泥水エノ語
Abbreviate ^{ed} -ing, <i>v. a.</i>	短カメル、畧スル	短カメル、畧スル

注: 赤字部は木版が消り取られて空白になっている部分を、赤字は填木して新たに改正増補された訳語をそれぞれ示す。

表1の赤字は填木して訳語を改正したものを示し、赤字部は、木版を削り取って不要な訳語を削除し、空白のままになっている箇所である。堀越の回想に反して、改正は1、2箇所に限らずに7箇所にも及んでいる。また、以下の図 (Lustily-Lustiness) に示すように、削除して空白となった部分は他の箇所でも再版以降はそのまま受け継がれている。

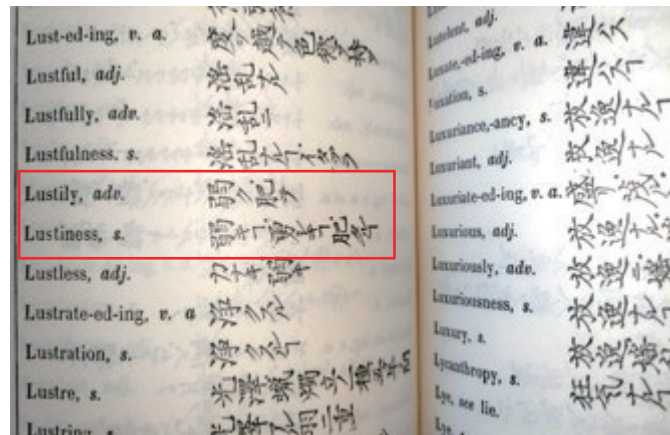


図 1-1 文久 2(1862)年初版の'Lustily'と'Lustiness'の訳語

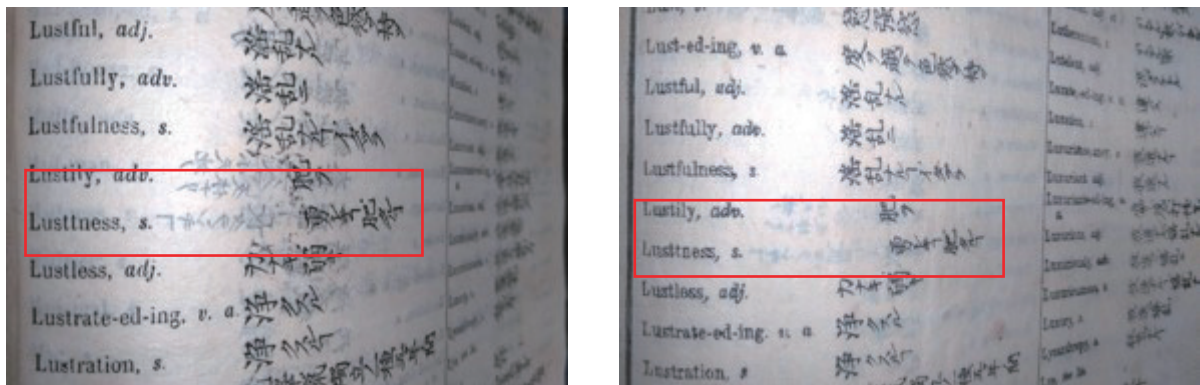


図 1-2 慶応 2 (1866)年再版(左)と慶応 3 (1867)年再版(右)の'Lustily'と'Lustiness'[sic]の訳語

図 1 を見ると、初版『袖珍辞書』(図 1-1) で掲出されていた「弱ク」「弱キヲ」が削除され、慶応 2 年再版(図 1-2 の左) 以降のすべての版(図 1-2 の右) でその部分は空白のままとなっている。

勝侯論考の上掲引用部に話を戻すと、『英和对訳袖珍辞書』には、文久 2 年初版(鳥の子・両面刷)、慶応 2 年再版(鳥の子・両面刷)、慶応 3 年再版(美濃紙・片面刷)、慶応 3 年再版(薄葉・片面刷)の 4 種類が存在することになる。また、この論考で注目すべきは、慶応 3 年以降の版はすべて蔵田屋の刊行であると指摘している点である。慶応 3 年再版本の中で扉に「開成所刊行」朱印のみられるものは「開成所」が、奥書に「明治二己巳年 蔵田屋清右衛門」とあるものは蔵田屋が刊行したとこれまで多くの研究者は考えてきた(惣郷, 1987, 1988; 高梨, 1978, p. 24; 惣郷, 1987, p. 9; 岩城, 1995, p. 147; 竹中, 2007, p. 16)。もしこの勝侯論考の指摘が正しいとすれば、これまでの研究者の見解を見直さなければならない。これまで勝侯の見解が見落とされてきたものなのか、あるいは他に何らかの手がかりがあってそのように考えられてきたのかは定かでないが、いずれにしてもこの勝侯の指摘は『改正増補』の刊行過程を明らかにする上で重要な意味を持つことは確かである。また、勝侯論考は、後に確認される慶応 3 年再版明治 2 年版刷についての言及や版刷間の異同を示す乱調ミス等の具体的な考察まで至っていないものの、『英和对訳袖珍辞書』の概要をかなり正確に捉えられているといっても過言ではない(杉本, 1999, p. 484)。

豊田 (1930) は、以下の引用に見るように、『改正増補』の異種について重要な指摘をしている。

慶応二年には開成所からこの辞書の再版が千部発行されたが、之は堀越亀之助の訂正を経たものである。之は私の所にもあり、其他この辞書の其の後の版で、扉には慶応三年江戸再版（但しこの「再版」は単に重版の意に解す可きである）となつて居るものが、私の所に三冊ある。但し本の最後に記してある所を見ると、その何れもが明治二年蔵田屋清右衛門の発行である。さうして三冊共横本であることは同じであるが、内二冊は黒のクロスの装釘で、終りに明治二年とあるその脇に官許としてあるが、残りの一冊は黄色の表紙の装釘で、明治二己巳年売捌蔵田屋清右衛門とした右脇に官許徳川氏蔵版とある。然るに前期の大会の後仙台に行つて東北帝大図書館にある狩野文庫中の英学書を見た際、其中に慶応三年江戸再版となつて居るこの辞書の版で、終りに別の年代のないものがあつた。之は開成所辞書の厳密な意味での第三版に当たるものと思はるゝ。(後略) (p. 52)

扉表記や巻末の刊記にもとづくこの豊田の説明は次のように解釈することができる。まず、慶応2年再版の重版ともいふべき「慶応三年江戸再版」本の中には巻末に刊記の無いものと「明治二年」とあるものの2種類があり、前者の無刊記本は、文字通り慶応3年に刊行された再版で、明治2年本はその再版である。このことから無刊記本の2年後に明治本が刊行されたことになる。また、明治本には、巻末に「明治二己巳年／売捌 蔵田屋清右衛門／官許 徳川氏蔵版」とあるものと、「明治二己巳年／官許／書肆 蔵田屋清右衛門」とあるもの2種類が存在する。したがって、以下のように、再版には慶応2年再版、慶応3年再版重版、明治2年再版重版(A)、明治2年再版重版(B)の4異版があることになる。

- (1) 慶応2 (1866) 年再版 【開成所】
- (2) 慶応3 (1867) 年再版重版 【蔵田屋】
- (3) 明治2 (1869) 年再版重版 (A) 【蔵田屋】「明治二己巳年／売捌 蔵田屋清右衛門／官許 徳川氏蔵版」
- (4) 明治2 (1869) 年再版重版 (B) 【蔵田屋】「明治二己巳年／官許／書肆 蔵田屋清右衛門」

図2は、慶応3年再版（無刊記、筆者私家蔵本）と慶応3年明治2年再版の2つのタイプ（早



図2-1 慶応3(1867)年再版無刊記本奥付(筆者私家蔵本)

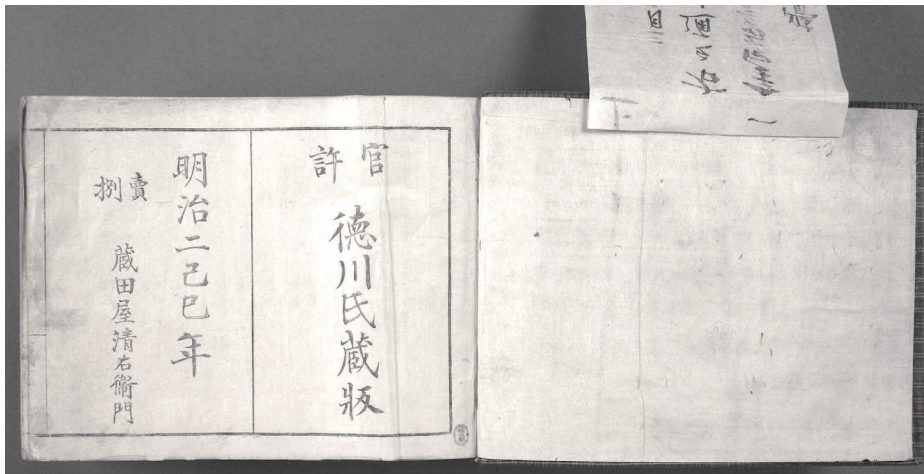


図 2-2 明治 2(1869)年再版(A) 奥付(早稲田大学蔵)

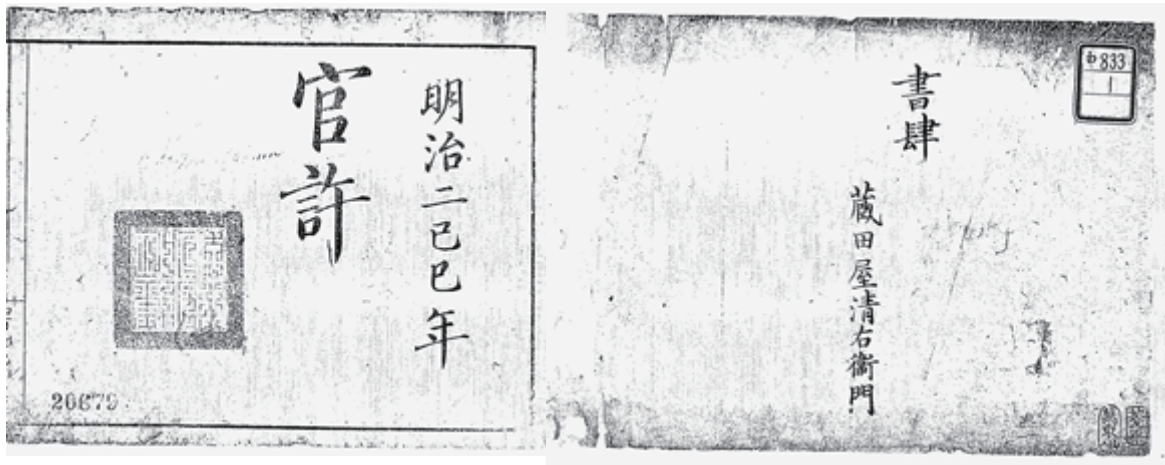


図 2-3 明治 2(1869)年再版(B) 奥付(国立国会図書館蔵)

稲田大学所蔵本と国立国会図書館蔵本)の奥付である。図 2-1 の慶応 3 (1867) 年再版は無刊記で 499 丁裏 (枠線のみ) と見返しに奥付がなく、一方、図 2-2 と図 2-3 の明治 2 (1869) 年再版の (A) と (B) のいずれの 499 丁裏にも奥付がある。ただし、(A) の見返しは (旧蔵者が和紙を貼付けてはいるが) 空白で、同 (B) の見返しには奥付の一部として書肆名「書肆 蔵田屋清右衛門」が記されている。

また、大阪女子大学 (現大阪府立大学) 図書館所蔵の『改正増補』を解題した大阪女子大学 (1962) は、豊田の先行研究を参考にしながら『改正増補』には 4 版種存在するとした上で、『改正増補』慶応 2 年版にみられる重要なミスについて言及している (pp. 171-172)。それは『袖珍辞書』のミスを補ったために生じた 402p の左右の見出し語段が誤って入れ違いとなり、原語と訳語がすべてずれてしまったミスである。1 行目を例に引くと以下のようなになる。

(402p 左段)

Indict-ed-ing v.a. 附キ従ハズニ、独立シテ | Independently adv. 罪ヲ言カケル

(402p 右段)

当時、同図書館には慶応2年再版は所蔵されていなかったもので、このミスについては解題者が私家蔵本（若林正治氏）を調査して確認したものである。興味深いのは、同館所蔵の「慶応3年江戸再版」無刊記の半裁本（薄葉紙を使用した和丁式印刷ながら版心を折り込んで各丁を4頁立てにしたもの）ではこのミス（201丁裏）が受け継がれているが、厚手料紙（美濃紙）を使用した「慶応3年江戸再版」の和装袋綴本ではこのミスが訂正されている。このミスは「ただの書誌的な事実にすぎないが、これが慶応3年の洋装半裁本と和装袋綴本との前後を決定するのである」（pp. 171-172）と述べているように、勝俣（1914b）ですでに指摘されている薄葉紙を使用したタイプにはこのミスが存在し、一方、厚手美濃紙を使用したタイプにはこのミスは見られない。慶応2年版との関係から見れば、同版のミスが受け継がれているタイプの慶応3年版は、訂正されているタイプより前に刊行されたと考えるのが妥当であろう。なお、この半裁本には奥書にあたる刊記がなく（大阪女子大学、1962, p. 174）、豊田（1930）が東北帝大図書館で確認した「厳密な意味での第三版」（p. 52）無刊記本の一つと思われる。

ただし、この大阪女子大学解題で留意したいのは『改正増補』初版で生じた上述のミスは、洋装半裁本にはそのまま受けつがれ、和装袋綴本では改められているのである。すわなち、洋装半裁本は再版初刷、和装袋綴本は再版再刷にあたりと見てよい」（p. 173）という解説の中にある「再版初刷」と「再版再刷」という表現である。これらの表現は後に杉本（1999, p. 524）が指摘するように曖昧な表現である。これらは一見すると、それぞれ「慶応2年再版初刷」と「慶応3年再版初刷」に相当するような記述である。したがって、同大学所蔵の半裁本はあたかも慶応2年再版初刷と類別される誤解を生む。というのは、半裁本の扉には間違いなく「慶応3年江戸再版」とあるからである。半裁本の解題中の別の箇所にも「慶応2年の『改正増補』初版」（p. 172）という表現が見えることから、この「再版初刷」は『改正増補』再版の初刷、すなわち「慶応3年再版初刷」で、「再版再刷」は『改正増補』再版の再刷、つまり「慶応3年再版2刷」とするのが正しい表現であろう。

鈴木（1975）は、滋賀大学図書館や大阪女子大学図書館⁴、西京商業高校（現京都市立西京高等学校）の所蔵する慶応3年『改正増補』の諸版を検討している。その中で、慶応3年版の特徴についていくつか重要な記述がみられる。まず、慶応3年版の扉には異種の朱印がみられることである。開成所の朱印のあるものと徳川氏の朱印のあるものである。前者は無刊記本の扉にみられ、後者は明治2年刊の巻末刊記が「明治二己巳年 官許 書肆 蔵田屋清右衛門」のタイプにみられる朱印である。同館には明治2年のもう一つのタイプと同定できる本がないため、徳川氏の朱印が明治2年刊の本に特徴的なのかどうかはこの時点では断定できなかったが、後の惣郷（1988）や杉本（1999）の調査において、慶応3年無刊記本には「開成所刊行」朱印が、明治2年刊のいずれのタイプの扉にも「徳川氏改印」朱印があることが判明している。したがって、文字通り厳密な意味での慶応3年刊と明治2年刊とを区別するには、これらの朱印の有無が有力な手がかりとなる。ただし、明治2年刊であっても「徳川氏改印」朱印を欠くもの（鈴木、1975, p. 51; 惣郷, 1988, p. 963）や慶応3年無刊記本の中にも「開成所刊行」朱印を欠くもの⁵が存在することに留意しなければならない。

『改正増補』に関する鈴木の記事で重要な第2点目は、「管見の範囲では」とことわってさらなる確認作業の必要性を示しながらも、先に挙げた慶応2年版で発生した見出し語段のミス

⁴1962年以後に慶応2年版と慶応3年版の各1本が同館に収められ、現大阪府立大学図書館には4本の所蔵がある。

⁵筆者による早稲田大学本の調査であきらかになった本〔文庫_C0590〕である。

(201 丁裏の見出し語段の入れ違い) を有するのは「開成所刊行」朱印のあるものと指摘している点である (p. 50)。第 3 点目は、慶応 3 年版では新たに 2 つのミスが発生したと指摘している点である。以下に示すように、一方は 76 丁と 78 丁の内容の入れ違いで、もう一方は 79 丁表右段の訳語と 79 丁裏右段の訳語の入れ違いである。

(76 丁)	(78 丁)
Confoundedly, adv. 恐怖シテ、大ヒニ	Concernment, s. 大切、感シ、仲入レ、事務
(79 丁表右段)	(79 丁裏右段)
Conscionable, adj. 気ヲ付テ、念入レテ	Considerately, adv. 正シキ

滋賀大学図書館所蔵無刊記本や大阪女子大学所蔵本、西京商業高校所蔵本にはこれら 2 つのミスが確かに認められる。既に触れた大阪女子大学所蔵半裁本については、前者のミスは内容順に直して綴じてあるが丁付はそのままで、後者のミスは訂正済みである。

杉本 (1980, 1999) は、早稲田大学図書館所蔵の『袖珍辞書』と『改正増補』の本格的な書誌的検討を行っている。同館に所蔵の、主に勝俣銓吉郎旧蔵の『袖珍辞書』及び『改正増補』を版種によって分類することがその目的である。この杉本論考によると、奥付を欠いたものなど厳密には編者・発行所は明確ではない本があること、さらなる精査の結果として分類を変更せざるを得ない本もあり得ること、という 2 つの条件付きながら、英文序や扉表記から版種は文久 2 年初版、慶応 2 年再版 1 刷、慶応 3 年再版 2 刷、慶応 3 年明治 2 年再版 3 刷の 4 種あることを確認している⁶。慶応 2 年再版 1 刷では、先に触れた 402p の段の乱調の他に 2 つの綴りミスがあるとしている。1 つ目は、551p の「One」項の短文中にある「It」を「In」とする綴りミスで、2 つ目は、英文序にある「important」を「inportant」とするミスである。402p のミスは再版 2 刷 (201 丁裏) にも受けつがれ、2 つの綴りミスは明治 2 年再版 3 刷 (英文序と 216 丁表) まで受けつがれていくとしている。また、慶応 3 年再版 2 刷本と明治 2 年再版 3 刷本について、体裁として改装されていて包背装のものもあり一見洋風であるが、いずれも片面刷の袋綴和本様式であることが大きな特徴である。さらに、1) 慶応 3 年再版 2 刷では慶応 2 年再版 1 刷にない新しいミスが 2 つ発生していること、2) 同じ慶応 3 年再版 2 刷でも慶応 2 年再版 1 刷のミスが訂正されているものと訂正されていないものが存在すること、3) 明治 2 年再版 3 刷ではまた新しいミスが生じていることである。1) のミスは鈴木 (1975) が指摘した 79 丁と 157・158 丁のミスである。157・158 丁のミスは、以下のようにそれぞれの内容を交代させ、丁付を訂正すればよいミスである。

(157 丁表左段)	(158 丁表左段)
Fracture-ed-ing, v. a. 缺ク、破ル	Fortuitousness, s. 存ジガケナキヲ

また、訂正されているものと訂正されていない 2) のミスとは、大阪女子大学 (1962) ではじめて指摘された 402p (201 丁) の見出し語段の乱丁 (「Indict-ed-ing.」と「Independently.」) で

⁶ 杉本 (1980, p. 9) の表 2 を参照されたい。

ある。重要なのは、この結果は、慶応3年再版2刷にも異種の存在の可能性を示している点である。また、3)の明治2年の新しいミスというのは、以下のように66丁の表右段と裏右段で訳語が入れ違っているミスである。

(66 丁表右段)	(66 丁裏右段)
Clatter-ed-ing, v. n. et a. 憐愍アル 温和ナル	Clement, clemently, adj. ガラガラ鳴ル、騒グ、 シャベル、打チ鳴ラス

もしこのミスが明治2年再版3刷に特徴的なミスであるとすれば、扉に「慶応三年江戸再版」とある純粹の意味での慶応3年再版2刷と明確に区別することができることになる。

さらに杉本(1980)は、早稲田大学図書館所蔵の明治2年再版3刷の扉には「徳川氏改印」朱印が、そして499丁裏の奥書には「官許 徳川氏蔵版(右半分) / 明治二己巳年 売捌 蔵田屋清右衛門(左半分)」の刊記があることを示している。後者については前述の豊田(1939)の項で示した(A)タイプということになる。杉本(1980)は「<明治二己巳年 官許 [朱印] (四九九丁裏) / 書肆 蔵田屋清右衛門(裏表紙裏)>とある版もあって、同じ明治二年本(略)としたものも、a・bの二種あることは確實」であるとしている(p. 22)。同館には(B)タイプの所蔵はないので、杉本は豊田(1980)らの先行研究を参照したものであろう。いずれにしても、扉に「<慶応三年江戸再版>とある版は、4種類あることになる」(杉本, 1980, p. 22)。結果として再版には5種類が存在することになり、まとめると以下の通りである。

- 慶応2年再版1刷 (1種)
扉：<慶応二年江戸再版>
- 慶応3年再版2刷 (2種)
扉：<慶応三年江戸再版>
- ★ 201丁ミス
(X) 未訂正
(Y) 訂正
- 慶応3年明治2年再版3刷 (2種)
扉：<慶応三年江戸再版>
- ★ 66丁ミス
- ★ 499丁裏奥書・裏表紙裏
(A) 官許 徳川氏蔵版 / 明治二己巳年 売捌 蔵田屋清右衛門
(B) 明治二己巳年 官許[朱印] / 書肆 蔵田屋清右衛門

大阪女子大学附属図書館(1991)は、先に触れた大阪女子大学(1962)の解題刊行以後に同館に収蔵された2本を含めた3本の慶応3年再版の考察を行っている(図書番号:<D3A> [薄葉紙半裁本]、<D3B> [厚手美濃紙]、<D3C> [厚手美濃紙])。その主なポイントは、大阪女子大学(1962)と鈴木(1975)で指摘された3つのミス、すなわち慶応2年再版で発生した(1)201丁のミス、慶応3年再版で発生した(2)76・78丁と(3)79丁のミスに着目した特徴づけである。まず、(1)のミスは「<D3A>では引き継がれているが(略)、<D3B><D3C>

では訂正されている」(p. 137)としている。一方、慶応3年再版特有の(2)のミスについては<D3B><D3C>では確認できるが「<D3A>では丁付けはそのまま製本の際訂正されている」(p. 137)としている。この指摘は大変興味深い。誰かが製本前にこのミスに気づき、丁付けの誤りはそのままであるが、78丁と誤って刷った丁を76丁目に、76丁と誤って刷った丁を78丁目に入れ替えたということだろう。(3)のミスは<D3A>では訂正されているが他の2本ではミスが認められるとしている。以上3つの特徴を以下のようにまとめている(p. 37)。

表2 大阪女子大学(現大阪府立大学)所蔵『改正増補』の誤植の有無

誤植	<D3A>	<D3B>	<D3C>
(1)	あり	訂正済み	訂正済み
(2)	訂正済み	あり	あり
(3)	訂正済み	あり	あり

これらの特徴とその解釈に関して指摘しておかなければならないことがある。まず、<D3A>の(2)のミスに関してである。表2では「訂正済み」としているが、これは製本段階で訂正しているのであって、印刷上のミス自体の存在は厳然たる事実である。(3)のミスについても、ミスそのものは存在するが印刷後に何らかの修正なり訂正を行っている可能性もあるので慎重な再調査が求められる。もし、<D3A>の(2)(3)のミスが印刷段階では存在したこと、すなわち「あり」と確認されたら、これら3本の成立に関する以下の解釈(pp. 137-138)、すなわち大阪女子大学(1962)は、

成立に関しては、<D3A>を再版初刷、<D3B>の和装袋綴本を再版再刷と見ている(『解題』発行時には<D3C>は本学に収められていなかった)。しかし誤植(2)(3)においては訂正順が逆になるので、これは苦しい見方である。

という解釈が逆に説得力に乏しい見解となり、むしろ大阪女子大学(1962)の「<D3A>を再版初刷、<D3B>の和装袋綴本を再版再刷」⁷と解釈の方が妥当ということになる。いずれにしても、成立に関してはより慎重な調査と解釈が求められる。

三好(2010a)は、『袖珍辞書』及び『改正増補』について「書誌的に新たな光を当てた考察」(三好, 2010a, p. 34)を行った。その考察で注目に値するのが次の4点である。まず、慶応2年再版には、1)「Neighbour, s.」の綴りが正しい綴りのものと、ミスで「Feighblour, s.」となっているものがあること、さらに2)「Turnsol, s.」の邦訳欄が空白であるものと、見出し語を「Turnsol, see Girasole」に変えてやはり邦訳欄が空白なものがあることである。これらの組み合わせだけで「慶応2年版には4種のバリエーションがあることが確認」(p. 36)されたという。これまで慶応2年版の異種の存在は確認されていないのでこの指摘はきわめて重要である。序でながら、慶応2年版に複数版が存在するという点に関して一つ付言しておきたい。三好は、惣郷(1988)が初版本の復刻版の解説に、「Visionary」の訳語変遷について触れ、慶応2年版では初版本の訳語を変えている点に関して、「20冊ばかり慶応2年版を調べたが、初版と同じものばかりであり、惣郷氏の指摘してきている記事と同じものが見付かっていない」(p. 35)と述

⁷ 前述したが「再版初刷」は「慶応3年再版初刷」、「再版再刷」は「慶応3年再版2刷」を指す。

べている。その惣郷氏の訳語改訂に係る解説というのは、「…Visionary, adj の訳語が、『想像ニテ、観応、想像ニテ脳中ニ現ズル像ノ（注略）』が『想像ニテ観ユル、想像ニテ脳中ニ現ズル像ノ（注は同じ）』と改められている」（p. 963）というものである。もし、この惣郷の指摘が事実であるとすれば訳語改訂を行った慶応2年版が存在することになる。そこで筆者蔵の初版（復刻版）と慶応2年版にあたってみたところ、なぜか惣郷と三好のいずれも見のがしている点があることがわかった。そもそも初版の訳語は、「想像ニテ造ラレタル、想像ニテ脳中ニ現ズル像ノ」となっている。すわわち、慶応2年版では、初版の「造ラレタル」を「観ユル」に変更し、さらに注を付けたものである。では、惣郷の指摘する「観応」という訳語はどう見たら良いのか。確定的なことは言えないが、おそらく、惣郷は縦書きの「𠄎𠄎」の「𠄎」を「応」と読み間違った可能性があるかと筆者は考えている。したがって、結論を言えば、初版の訳語は慶応2年版では確かに変更になってはいるが、慶応2年版ではすべて同じ訳語が当てられていると考えるのが妥当であろう。

三好 (2010a) で注目すべき第2の点は、慶応3年再版は英語もすべて木版にしたことで綴りミスは発生したが訳語は慶応2年再版と同じと見られてきたことである。しかし、先に触れた1) 「Turnsol, s.」の訳語は慶応3年再版では「草ノ名」に変更されていること、2) 「Vamper, s.」の訳語は慶応2年再版では「古キ着 ノ補ヒスル人」であるが慶応3年再版では「古キ着物ノ補ヒスル人」と訂正されていること、同様に3) 「Vegetable, s.」の訳語は慶応2年では「植物、野菜」であるが慶応3年再版では「植物、生物、野菜」と訂正されていること、このように訳語の訂正が見られるのである。ちなみに、これら3語の訳語について『袖珍辞書』初版を確認すると、それぞれ1) 「向日葵」2) 「古キ着物ノ補ヒスル人」3) 「植物、生物、野菜」となっている。2) と3) については、何らかの理由で慶応2年再版では削除した訳語（「物」と「生物」）を慶応3年再版では初版の訳語に戻したことになる。1) の変化については、単なる誤植やミスの訂正とは考えられない。三好 (2010a, p. 35) も示唆しているように、何らなの学術的な理由や考察が背景にあったものと考えられる。第3に、三好 (2010a) は、扉に「慶応三年江戸再版」とある本の中に、以下の1) 172 丁裏左右段の見出し語と訳語の入れ違いや、

(172 丁裏左段)		(172 丁裏右段)
Grig, s. 礼儀、会釋、祝ヒ		Greeting, s. 食用ニナラヌ鰻

2) 201 丁の入れ違い、そして3) 「Porridge, s.」の訳語欄の空白、という特徴のあるものがあるとした上で、慶応3年版と明治2年版で異なるのは、後者では1) と2) が訂正済みで、3) は空白になっている点であるとしている。しかし、杉本 (1980, 1999) の考察のように、2) の201 丁の乱調について、慶応3年再版の中にも「訂正済み」のものもすでに存在するので、この指摘は当たらないようである。しかし、1) と3) については慶応3年版と明治2年版とを分ける特徴である可能性もあるので慎重な検討を要す。

さらに、三好 (2010b) は、信州大学繊維学部附属図書館蔵の慶応3年版⁸について考察している。詳細な書誌的記述はないが、2本のうちの1本（表紙と扉が欠落）の料紙について興味深い観察をしている。この本は、厚さが2.5cm とかなり薄手の辞書で「本文の用紙は極薄い和

⁸ 上記三好 (2010a) の考察をもとに明治2年ではないと判別したものである。

紙を袋綴にしたもので、これに片面印刷している」ことから勝俣 (1914b) のいう「薄葉片面摺」に該当するものと思われる。「ただしなぜか巻末にある略語集の Prof. 以降の六枚だけは厚手の和紙になっている」(p. 6) というのである。たまたま薄手紙が不足したものか、痛みやすい巻末を厚手の和紙で補強したものか、その理由は不明ながら、このように薄葉紙と美濃紙を混用したものは極めてめずらしい。

以上の先行研究から、『袖珍辞書』の再版本『改正増補』には、種々異版刷本があり、これまで異同が確認されていなかった再版初刷である慶応2年刊にさえも異版があることや、慶応3年以後に刊行された再版再刷には、少なくとも4種があることが明らかになった。しかし、『改正増補』の版刷の同定には依然として不確かな点がある上、扉や奥付(刊記)等が欠損している本にあっては、版刷の同定は容易ではない。そこで、本研究では、『改正増補』のさらなる追究を通してより精度の高い版刷判別を目指すこととする。

3. 調査の方法と概要

本研究で筆者が調査した『改正増補』の所蔵先と所蔵数は以下の通りである。

- 高知県立牧野植物園〔牧野文庫〕(6本)
- 早稲田大学図書館〔洋学文庫・古典籍総合データベース〕(9本)
- 国立教育政策所教育図書館(1本)
- 国立国会図書館〔デジタルコレクション〕(1本)
- 大阪府立大学図書館(4本)
- 香川大学図書館〔神原文庫〕(3本)
- 京都市立西京高等学校図書館(1本)
- 京都府立図書館(1本)
- 高知県高岡郡佐川町〔川田文庫〕(1本)
- 大阪市立開平小学校〔愛日文庫〕(1本)
- 高知大学図書館(1本)
- 私家蔵(7本、元香川大学教授・竹中龍範氏3本、筆者4本)

総数は36本である。調査を開始したのは、平成14(2002)年のことである。高知県立牧野植物園にある世界的な植物学者・牧野富太郎の旧蔵書(高知県立牧野植物園, 1986)の中に『英和対訳袖珍辞書』の諸版(図3)が所蔵され、初版も含まれていることを確認したのがそのきっかけであった。したがって、本論で考察する内容は、『袖珍辞書』の発見から18年間をかけて継続調査した結果である。ICTの時代にあって、早稲田大学図書館・洋学文庫〔古典籍総合データベース〕の9本と国立国会図書館デジタルコレクションの1本、国立教育政策所教育図書館の1本については、ネットで閲覧、調査したもので、その他はすべて所蔵先で実見によって調査したものである。なお、三好(2010a)で取り上げられている『改正増補』再版初刷(慶応2年刊)については、同論考に所蔵先が明記されていないため調査することは叶わなかった。未見である。



図3 高知県立牧野植物園・牧野文庫所蔵の『英和对訳袖珍辞書』(左から文久2年初版、慶応2年再版、慶応3年再版(無刊記)、慶応3年再版(無刊記)、慶応3年再版(無刊記)、明治2年再版(B)、明治2年再版(B))

調査にあたっては、先行研究をベースとしながら、筆者が新たに発見した特徴を含めて、主として、綴りミス、訳語空白欠損、乱調(丁)、扉と大尾の筆字体の4つの大項目、計19小項目について、それぞれの本に特徴が見られるか否かを確認していった。

4. 調査の結果と考察

先行研究で明らかにされた諸特徴及び今回の調査で新たに確認した再版本の特徴、判別のための手がかりは以下の(a)から(s)の(4大項目:綴りミス、訳語空白欠損、乱調(丁)、筆字体)、計19項目である。それぞれの項目内容(綴りミスや乱調などの異同)及びそれを指摘した先行研究(文献等)は以下の通りである。

1) 綴りミス

- (a) 扉の綴りミス「EDITION [正 EDITION]」(京都市立西京高等学校図書館, 1967, p. 69)。
- (b) 「略語之解」の綴りミス「EXPLANATIONS OF ABBREVIATIONS [正 ABBREVIATIONS]」(京都市立西京高等学校図書館, 1967, p. 69)。
- (c) 498丁裏の右段(997p)の綴りミス「Arbitrary Signs (象形記号之解)*** — ellipses, denoting [正 denoting] the omission …」。筆者による今回の調査で新たに確認された項目である。
- (d) 40丁裏(80p)の綴りミス「Belst [正 Blest]」(杉本, 1999, p. 517)(図6参照)。なお、このミスがない再版初刷本(慶応2年刊)もあることを今回新たに確認できた。
- (e) 41丁表(81p)の綴りミス「Bloo-hound [正 Blood-hound]」(杉本, 1999, p. 517)。

- (f) 231 丁裏 (462p) の綴りミス「Liquid [正 Liquid] (荒木, 1931, p. 165; 勝俣, 1914b, p. 56; 竹中, 1997, p. 5)。
- (g) 265 丁裏 (530p) の綴りミス「Feighbour [正 Neighbour]」(三好, 2010a, p. 36)。
- 2) 訳語空白欠損
- (h) 308 丁表 (615p) の邦訳語の欠損「Porridge, s. (空白) [正「粥ノ糞」]」(三好, 2010a, p. 37)。
- (i) 428 丁裏 (856p) の‘Turnsol’の見出し語変異と邦訳語有無 (1)「Turnsol, s.」(2)「Turnsol, see Girasole.」(3)「Turnsol, s. 草ノ名」(三好, 2010a, p. 36)。三好によれば、(1) (2) は慶応2年本の特徴、(3) は慶応3年無刊記本及び明治2年本の特徴としている。
- (j) 454 丁表 (907p)「Vamper, s.」の訳語欠損 (○)「古キ着 ノ補ヒスル人」(×)「古キ着物ノ補ヒスル人」(三好, 2010a, p. 36)。
- (k) 454 丁裏 (908p)「Vegetable, s.」の訳語欠損 (○)「植物 . 物、野菜」(×)「植物 . 生物 . 野菜」(三好, 2010a, p. 36)。
- 3) 乱調 (丁)
- (l) 66 丁表の右段と裏の右段 (131p-132p) の訳語の入れ違い「Clatter 憐愍アル ⇔ Clement ガラガラ鳴ル」(杉本, 1980, p. 19)。
- (m) 76 丁表と裏の両面 (151p-152p) と 78 丁の表と裏の両面 (155p-156p) の入れ違い「Confoundedly, adv. 恐怖シテ、大ヒニ ⇔ Concernment, s. 大切、感シ、仲入レ、事務」(鈴木, 1975, p. 50)。
- (n) 79 丁表の右段と 79 丁裏の右段 (157p-158p) の訳語の入れ違い「Conscionable 気ヲ付テ、念入レテ ⇔ Considerately 正シキ」(杉本, 1980, p. 19)。
- (o) 157 丁 (315p-316p) 表と裏の両面と 158 丁 (313p-314p) 表と裏の両面の入れ違い「Fractured-ing, v.a. 缺ク、破ル ⇔ Fortuitousness, s. 存ジガケナキヲ」(杉本, 1980, p. 20)。
- (p) 172 丁裏の左右段 (344p) の見出し語及び訳語の入れ違い「Grig, s. 礼儀、会釋、祝ヒ ⇔ Greeting, s. 食用ニナラヌ鰻 [正 : Greeting, s. 礼儀、会釋、祝ヒ ⇔ Grig, s. 食用ニナラヌ鰻]」(三好, 2010a, p. 37)。ただし、「Grig, s. 食用ニナラヌ鰻 ⇔ Greeting, s. 礼儀、会釋、祝ヒ」のように、訳語の入れ違いは解消されたが、なお見出し語のアルファベット順が左右入れ違いのままの本もあることが今回の調査で明らかになった。
- (q) 201 丁裏の左右段 (402p) の見出し語の入れ違い「Indict-ed-ing v.a. 附キ従ハズニ、独立シテ ⇔ Independently adv. 罪ヲ言カケル」(大阪女子大学, 1962, p. 171)。
- 4) 筆字体
- (r) 巻首扉の「英和对訳袖珍辞書」及び「慶応二[三]年江戸三版」の筆字体に2種類が存在する。今回の調査で判明した。
- (s) 最巻末、499 丁表 (998p) の「英和對譯辞書大尾」の筆字体に3種類が存在する。今回の調査で明らかになった。

これらのうちの4項目、すなわち (c)、(p)、(r)、(s) については、今回の調査で新たに明らかになった特徴である。まず、(c) については、496 丁裏から 499 丁表にある「Arbitrary Signs (象形記号之解)」の中の、498 丁裏の右段 (997p) にある綴りのミスである。「*** or — ellipses, denotng the omission of some letters or words. as L**d N** for Lord North.」にある、‘donotng’

は正しくは‘denoting’とならなくてはならない。この綴りのミスはこれまで見逃されてきたものである。次に、(p) については、すでに三好 (2010a, 37) が指摘しているように、172 丁裏の左右段 (344p) の見出し語及び訳語の入れ違い「Grig, s. 礼儀、会釋、祝ヒ ⇔ Greeting, s. 食用ニナラヌ鰻」が起きており、正しくは、「Greeting, s. 礼儀、会釋、祝ヒ ⇔ Grig, s. 食用ニナラヌ鰻」とならなくてはならない。しかし、今回、新たに判明したのは、訳語の入れ違いは解消されているが、なお見出し語のアルファベット順が左右入れ違いのままの再版本があることである。すなわち、「Grig, s. 食用ニナラヌ鰻 ⇔ Greeting, s. 礼儀、会釋、祝ヒ」と見出し語と訳語は正しく関係付けられているが、見出し語の順から言えば、‘Greeting’ が先にこなければならない。したがって、このミスについては、2つのタイプ、すなわち全く改善されているもの (×) と一部が改善されているもの (△) があり、この特徴もこれまで指摘した研究者は私が知る限りでは皆無である。

次に筆字体の異同については先行研究で考察されてきた異同とはまったく異質な特徴である。まず (r) については、辞書の巻首にある扉の漢字の筆字体の異同である。筆者は、辞書名の「英和对訳袖珍辞書」及び刊行年を記した「慶應二年江戸再版」「慶應三年江戸再版」の字体に以下に示すように2種の異なる筆字体を見出した (図 4-1、図 4-2)。図 4-1 は慶應2年刊再版初刷の筆字体で、図 4-2 は慶應3年刊再版2刷 (左) と明治2年刊再版3刷 (右) の筆字体である。いずれも早稲田大学図書館蔵本である。

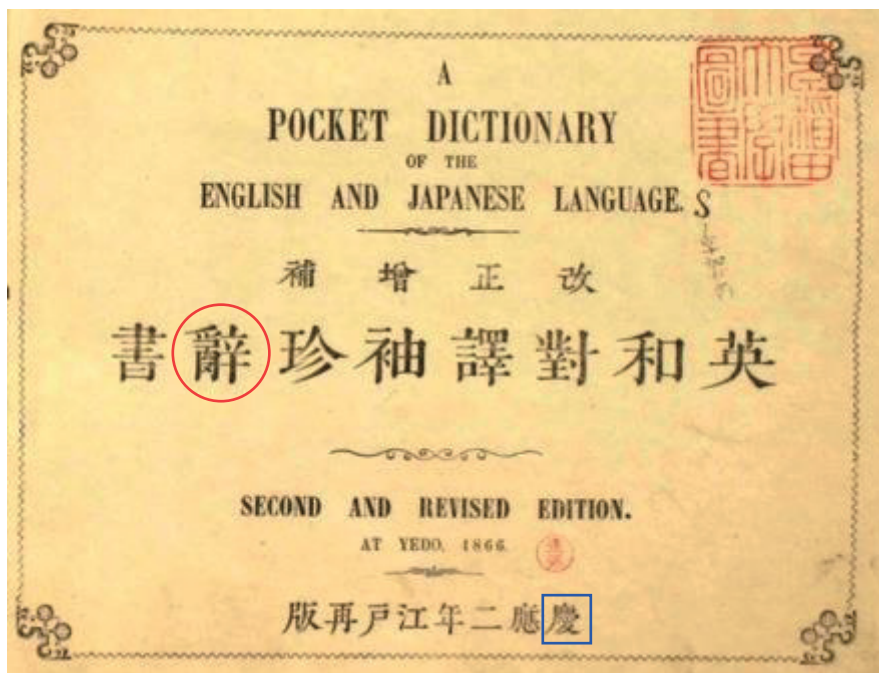


図 4-1 『改正増補』再版慶應2年刊の扉 (A) タイプ



図4-2 『改正増補』再版慶応3年刊(2刷無刊記と3刷明治2年刊)の扉(B)タイプ

図4-2の慶応3年刊再版2刷と明治2年刊再版3刷の扉の筆字体は完全に一致し([B])、慶応2年刊再版初刷の筆字体([A]タイプ)とは明らかに異なる。注目したい筆字体は、辞書名の「辭」と刊行年を示す「慶」である。慶応2年刊の「辭」の第1筆は慶応3年刊及び明治2年刊のよりも顕著に長い。また、「慶」の字をよく見ると、最後の第15筆が異なる。慶応2年刊の第15筆は長く、慶応3年刊及び明治2年刊のそれは明らかに短い。よって、本文の板木(日本語訳語)は慶応2年のものを流用した(惣郷, 1974)可能性はあるが、扉は慶応2年刊の扉と慶応3年刊及び明治2年刊は異なる板木によって印刷されたことは明らかである。

次に、(s)については、最巻末にある「英和對譯辭書大尾」の筆字体に異同が認められることである。この標示は、初版『袖珍辭書』(文久2年刊)の巻末には見られず、再版本(慶応2年刊以後)にのみ確認できる。今回の調査では、以下のように3種類が確認できた(図5)。

具体的に異同を見ていこう。まずひと際目を引くのは、[3]の「英」の字の第1筆(草冠)の特徴的な入りである。他の筆字体とは顕著に異なっている。この調査で明らかになったのは、

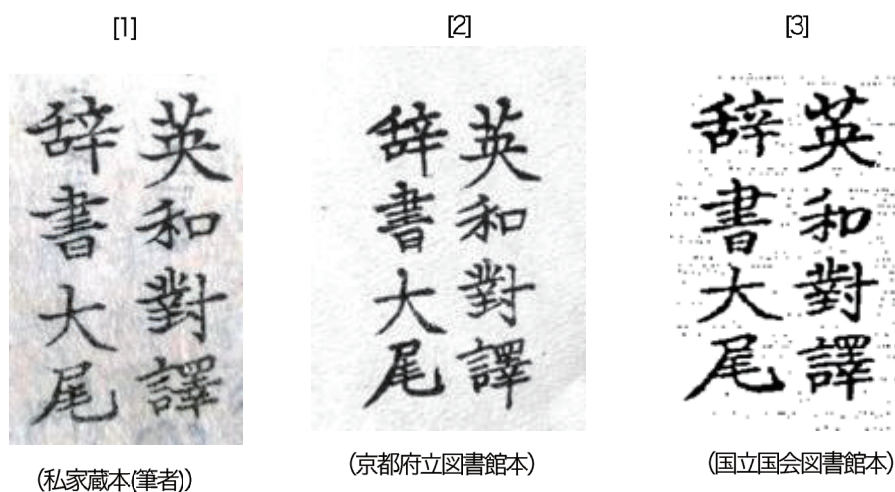


図5 『改正増補』大尾に見られる3つの異なる筆字体

乱調 (丁)	(l)	×	×	×	×	-	×	×	×	○	○	○	○	○
	(m)	×	×	×	×	-	○	○	○	○	×	○	×	×
	(n)	×	×	×	×	-	○	○	○	○	○	○	○	○
	(o)	×	×	×	×	-	○	○	○	○	○	○	○	○
	(p)	×	×	×	×	-	○	○	○	○	△	○	△	○
	(q)	○	○	○	○	-	○	×	×	×	×	×	×	×
筆字体 扉	(r)	[A]				-	[B]				[B]	[B]	[B]	
筆字体 大尾	(s)	[1]				-	[2]				[2]	[3]	-	

注:「○」ミス等が見られるもの;「×」ミス等が見られないもの;「△」2重のミス等があり、一方は解消されているがもう一方は依然残っているもの;「-」未見のため不明なもの

なお、慶応2年刊、慶応3年刊の全タイプに共通のミスは省略する。例えば、堀達之助の序の綴ミス「inportant [正important]」「In is all one to me. [正It is all one to me.]」(杉本, 1980, 14) や「go abrount [正go abroad.]」(大阪女子大学附属図書館, 1991, p. 135)、本研究で明らかになった、「Abate-ed-ing, v. a. etn [正Abate-ed-ing, v. a.]」、「Lair [正Liar]」「Neihh-ed-ing [正Neigh]-ed-ing」、そして「Lusttness [正Lustiness]」である。なお、1つ重要な点を付言しておく。表中のタイプ順(アルファベット)は必ずしも刊行順を正確に示しているものではない。綴りのミスや乱調(丁)などが近いものを便宜的に並べたに過ぎない。この問題については、将来、稿を改めて考察したい。

表3の結果を概略まとめると、以下の通りである。

- 1) 『改正増補』再版初刷(慶応2年刊)には5つの異版タイプが存在する可能性がある
- 2) 奥付のない無刊記本の『改正増補』再版2刷にも5つの異版タイプが存在する
- 3) これまで、扉に「慶応三年江戸再版」とあり、奥付に「明治二己巳年」と表記された、蔵田屋清右衛門による明治版は2種あるとされてきたが、いずれとも異なるもう一つの版が存在する可能性がある
- 4) 扉の辞書名「英和對譯袖珍辭書」と刊行年を示す「慶応二[三]年江戸再版」の筆字体は2種あり、慶応3年刊再版2刷と明治2年刊再版3刷の筆字体は同一と見てよい
- 5) 巻末の「英和對譯辭書大尾」の筆字体は3種有り、慶応2年刊再版初刷の1種と慶応3年再版2刷無刊記と明治2年再版3刷の一部に共通の1種と明治2年刊の一部にのみ見られものがある

まず、少なくとも5変種があることが判明した『改正増補』再版初刷(慶応2年刊)の異タイプを分けるのは(d)40丁裏(80p)の綴りミス「Belst [正Blest]」の有無(図6)、(g)265丁裏

⁹ 「etn」という unnecessary な文字が入り込んだ誤植である。ただし、慶応2年再版では「etn」であるが、慶応3年再版以降は「etu」となっている。

(8 0)			
Bleak, s.	河魚名者	Blessing, s.	不幸積者不幸
Bleakly, adv.	寒く	Blest, (Blessed), adj.	幸不幸多者元
Bleakness, s.	色多者打問屋果	Blew, part. of Blow.	強賊難堪現点鏡強賊
Bleaky, adj.	打問屋果者青	Blight, s.	積費
Blear, adv.	暗眼者者	Blight-ed-ing, v. a.	積費腐者樹木生其毒
Blear-ed-ing, v. a.	暗眼者者眼汁出	Blind, s.	盲者者者者者者
Blear-eyed, adj.	眼汁出者者	Blind, adj.	盲者者者者者者者
Bleat, Bleating, s.	羊声	Bornblind,	盲者生元
Bleat-ed-ing, v. a.	吼	Blind-ed-ing, v. a.	盲者生元
Bleed, bled, bleeding, v. a. & n.	割唇出血	Blindfold, adj.	目隠者者
Bleeding, s.	出血者者者者	Blindfold-ed-ing, v. a.	眼隠者
Blemish, s.	瑕者者者者	Blindly, adv.	蒙昧
Blemish-ed-ing, v. a.	瑕者者者者者	Blindman's buff, s.	眼隠者
Bleach-ed-ing, v. a.	交交者者	Blindness, s.	眼盲者者者者
Blender, s.	交交者者	Blink-ed-ing, v. n. & a.	目多者者者者者
Bless-ed-ing, v. a.	幸者者者者	Biss, s.	不幸福
Blessedly, adv.	幸者者者	Bissful, adj.	不幸者者者
Blessedness, s.	幸福		

図6 慶応2年再版初刷(私家蔵・筆者)の綴りミス((d) Belst [正 Blest])

(530p) の綴りミス「Feighbour [正 Neighbour]」の有無、(i) 454 丁表 (907p) 「Vamper, s.」の訳語欠損が有るか (○)「古キ着 ノ補ヒスル人」あるいは無い (×)「古キ着物ノ補ヒスル人」の3つの異同である。(r) の筆字体はすべて同一であることは疑う余地はないので、厳密に言えば異版というよりも、基本的には同一の板木を使用しながら気がついた綴りのミスや乱調(丁)をその都度訂正していったものと考えてよいであろう。

次に慶応3年刊再版無刊記本の異タイプについて検討してみよう。表3に示すように、5つの変種があるが、それを分けるのは (h) 308 丁表 (615p) の邦訳語の欠損「Porridge, s. (空白) [正「粥ノ類」]」の有無、(l) 66 丁表の右段と裏の右段 (131p-132p) の訳語の入れ違い「Clatter 憐愍アル ⇔ Clement ガラガラ鳴ル」の有無、(m) 76 丁表と裏の両面 (151p-152p) と 78 丁の表と裏の両面 (155p-156p) の入れ違い「Confoundedly, adv. 恐怖シテ、大ヒニ ⇔ Concernment, s. 大切、感シ、仲入レ、事務」の有無、(p) 172 丁裏の左右段 (344p) の見出し語及び訳語の入れ違い「Grig, s. 礼儀、会釋、祝ヒ ⇔ Greeting, s. 食用ニナラヌ鰻 [正: Greeting, s. 礼儀、会釋、祝ヒ ⇔ Grig, s. 食用ニナラヌ鰻]」の有無、(q) 201 丁裏の左右段 (402p) の見出し語の入れ違い「Indict-ed-ing v.a. 附キ従ハズニ、独立シテ ⇔ Independently adv. 罪ヲ言カケル」の有無である。訳語の訂正と原語段と訳語段の入れ違いの有無が多い。この無刊記本も慶応2年再版初刷と同様に、大尾の筆字体はすべて一致することから、これらも異版とするよりは、むしろ同じ板木を使用して順次訂正や修正を行っていたものと考えられる。

第3に、扉に「慶応三年江戸再版」とあり、奥付に「明治二己巳年」の異タイプについてである。これまで、F (A) タイプと G (B) タイプ の2つの版が確認されていたが、F (A) タイプに見られる (m) 76 丁表と裏の両面 (151p-152p) と 78 丁の表と裏の両面 (155p-156p) の入れ違い「Confoundedly, adv. 恐怖シテ、大ヒニ ⇔ Concernment, s. 大切、感シ、仲入レ、事務」は解消されているが、(p) 172 丁裏の左右段 (344p) の見出し語及び訳語の入れ違い「Grig, s. 礼儀、会釋、祝ヒ ⇔ Greeting, s. 食用ニナラヌ鰻」とその見出し語のアルファベット順が左右入れ違いのままの H タイプの存在が明らかになった。この本の尾にあたる 499 丁が欠損しているため、大尾の筆字体は確認することはできなかった。

第4に、扉の辞書名と刊行年に見られる筆字体によれば、慶応2年間再版初刷の変種はすべて同じ版を使用し、それ以降の再版3刷はすべてもう1つの版を使用していることが明らかになった。したがって、これまで先行研究でも慶応3年の無刊記本以後は、新版ではなく、再版の異刷であるとされてきたことが本研究の調査結果から改めて確認できたことになる。そして、このことは、再版の改正増補にあたった堀越亀之助が述べているように、扉に開成所刊行という朱印のある慶応3年刊再版の無刊記から明治2年刊に至るまでの再版2刷3刷を蔵田屋清右衛門が1つの板木を使用して刊行したものと考えられる。

第5に、明治2年刊の F (A) タイプの大尾の筆字体が慶応3年無刊記本と同一で、かつ、綴りミスや乱調 (丁) 等の特徴は無刊記の D タイプとすべての点で一致する。今後の更なる研究を待たなければならないが、明治2年刊で奥付に「官許 徳川氏蔵版／明治二己巳年 売捌 蔵田屋清右衛門」とある本は、基本的には慶応3年刊の無刊記本を踏襲し、奥付の部分だけを変更したものと推定することができる。もしこの推定が正しければ、明治2年刊本の刊行順は、これまで指摘されてきたように、F (A) タイプが先行し、G (B) タイプが後続したとするのが合理的であろう。H タイプは残念ながら大尾の表記を欠損しているため刊行順は推定できない。なお、慶応3年刊再版 E タイプと明治2年 G (B) タイプは便宜上それぞれ「慶応3年 (無刊記)」と「明治2年 (刊記：蔵田屋清右衛門)」に分類しているが、今回の調査では乱調ミス等の特徴は完全に一致する。したがって、「無刊記」E タイプは、純粋な意味での慶応3年刊ではなく、明治2年刊の「無刊記」タイプの可能性もあることを付言しておきたい。さらにもう1つ重要なのは、なぜ大尾の筆字体に3種あるのかという点である。明治2年刊は和装袋とじ型の印刷製本の方式をとる。そこで、刷の発行年を示すために奥付を変更しようとするれば、表面も新たに刻成しなければならない。明治2年刊の大尾は 499 丁表であり、499 丁裏の奥付を変更しようとするれば、当然ながら表面も新しくするのが合理的である。したがって、慶応3年刊無刊記は、扉に刊行年が記されているため、敢えて巻末に発行年を記す必要はなく、そのため 499 丁裏は空白の無刊記となった。しかし、多少の修正はあるものの基本的には同じ版木を使用して明治2年に発行した際には、499 丁裏に奥付となる「明治二己巳年」などと刻成したため、それに伴って大尾を含めて表面を新たに刻成しなければならなかったものと考えられる。

以上、今回新たに見出した手がかりを含めた再版本の諸特徴の有無、異同をもとに、慶応2年刊再版初刷、慶応3年刊再版2刷、明治2年刊再版3刷の各タイプの実相を見てきたが、今後の研究のため、表3に示した各版刷本の主な所蔵先を確認しておきたい。なお、各所蔵先で「分類番号」が付されているものは、それも示した。また、判別の根拠も必要に応じて【 】で示した。

○慶応2(1866)年刊再版初刷

- A タイプ 早稲田大学(文庫 08_C0589)
 B タイプ 高知県立牧野植物園(四7(二)13)、大阪府立大学(43A)、私家蔵(筆者 MK2)(図7)、私家蔵(元香川大学教授・竹中龍範氏 TK2)、香川大学神原文庫(833-1)
 C タイプ 早稲田大学(文庫 08_C0588)
 D タイプ 早稲田大学(文庫 08_C0587)
 E タイプ 未見本(三好, 2010a, p. 36)



図7 慶応2年再版初刷(Bタイプ、筆者私家蔵)

○慶応3(1867)年再版2刷(無刊記)

- A (X) タイプ 大阪府立大学(43 B)、高

知県立牧野植物園(四7(二)14(薄葉紙)、同(四7(二)(薄葉紙))、早稲田大学(文庫 08_C0590(美濃紙)[開成所刊行印無]、早稲田大学(文庫 08_C0593(薄葉紙))、早



図8 慶応3年再版2刷(無刊記、Bタイプ、筆者私家蔵)

稲田大学(文庫 08_E135(薄葉紙))、早稲田大学(ホ 06_01218(美濃紙))、京都市立西京高等学校(34(美濃紙))、香川大学神原文庫(833-2)

- B タイプ 大阪府立大学(44B)、私家蔵(筆者 K3-1)、【府立大の(44B)は扉、序文、499丁ウを消失しているが、慶応3年無刊記本の特徴の一つ「(l) ×」と巻末「英和对訳辞書大尾」の筆字体から「慶応3年無刊記」本と思われる。しかし「(h) × (q) ×」という特徴をもつ無刊記本は未確認のためBタイプと分類した。】

- C (Y) タイプ 早稲田大学(文庫 08_C0592)

D タイプ 国立教育政策所教育図書館(KI830-1)【(h) ○ (l) ○ (p) ○ (q) × という特徴、F(A)と乱丁・ミス等は一致するものの、扉の「開成所刊行」朱印、奥書の無い無刊記、大尾の筆字体は2刷と一致】

E タイプ 高知県立牧野植物園(四7(二)15)、私家蔵(筆者 K3-2)【高知県立牧野植物園本は扉に「開成所刊行」朱印があり奥書の無い「無刊記」本ながら明治2年刊のG(B)と特徴一にする特徴的な1本である。また、私家蔵(筆者 K3-2)については、扉と序と497丁と奥書が消失しているため判別は慎重を要すが、乱調ミスの特徴((h) ○ (l) ○ (m) × (p) △ (q) ×)からEタイプかG(B)タイプのいずれかと思われる。今回の調査で明らかになっ

¹⁰『牧野文庫蔵書目録(和漢・漢籍の部)』(1986年)の刊行後に牧野富太郎の親族(岩佐家)から寄贈された『改正増補』である。

た E (無刊記) と G (B) の唯一の相違点は巻末「英和對譯辭書大尾」の筆字体である。私家蔵 (筆者本 MK3-2) の筆字体は G (B) タイプのそれと明らかに異なり、E タイプに分類される牧野文庫の無刊記本 (四 7 (二) 15) のそれと一致するのでこのタイプと判断した。】

○明治 2 (1869) 年刊再版 3 刷

F (A) タイプ 早稲田大学 (文庫 08_C0591)、京都府立図書館 (020-7)、私家蔵 (元香川大学教授・竹中龍範氏 TK3-1) 【私家蔵 (竹中氏) は扉、奥書ともに欠損しているが「(l) ○ (m) ○ (p) ○」の特徴と「英和對譯辭書大尾」筆字体からこのタイプと判断した。】

G (B) タイプ 高知県立牧野植物園 (四 7 (二) 16)、同 (四 7 (二) 17)、高知県高岡郡佐川町 (361-10)、愛日教育会 (大阪市立開平小学校) (1200)、私家蔵 (竹中氏 TK3-2)、高知大学附属図書館 (833. 2 Eiw)、国立国会図書館 (デジタルライブラリー 87010: わ 833-1)、香川大学神原文庫 (833-3)、私家蔵 (筆者 MK3-1) (図 9) 【高知大学 (833. 2 Eiw) と私家蔵 (村端 MK3-1) は奥書が欠損しているが、扉の「徳川氏改印」朱印とミスの特徴「(m) × (p) △」と巻末「英和對譯辭書大尾」の筆字体からこのタイプと判断した。神原文庫 (833-3) の 499 丁ウの「明治二己巳年 官許 [蔵版朱印]」は存するが「書肆 蔵田屋清右衛門」と本来ある裏表紙見返しは欠損している。】

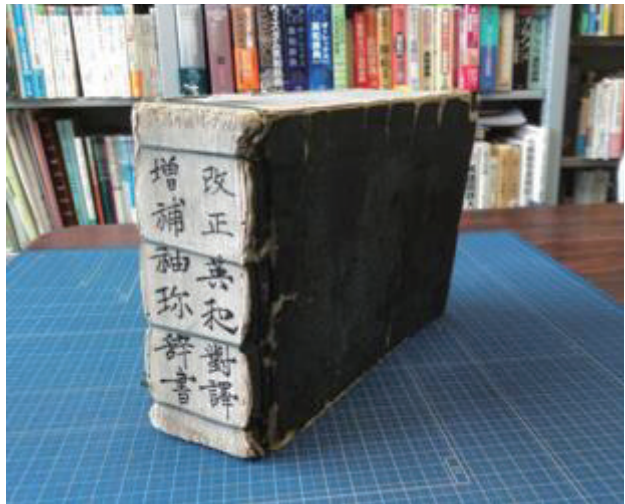


図 9 慶応 3 年再版 3 刷 (G(B) タイプ、筆者私家蔵)

H タイプ 大阪府立大学 (44A) 【この本は扉右上「徳川氏改印」朱印と「(l) ○ (q) ×」の特徴から明治 2 年本の 1 種と思われる。499 丁と裏表紙見返し欠損のため「英和對譯辭書大尾」記および無刊記本に特徴の 499 丁裏の空白頁は確認できない。「(m) × (p) ○」という特徴をもつ明治 2 年本は未確認のためこのタイプとした。】

5. おわりに

以上、本論考では、今回新たに見出した手がかりを加えた各種のミスや乱調 (丁)、筆字体など 19 の特徴にもとづき、各地の図書館や文庫及び私家蔵の『改正増補』をタイプ別に分類した。とは言え、これら 19 の特徴がすべてとは言いきれず、今回の調査と同様に、また新たな手がかりが発見され、場合によっては上の分類を変更する必要性が出てくることもあるだろう。そういう限界はあるものの、今回の研究調査で明らかになった以下の点の意義は大きいと考える。以下の 3 点をもって本論の結論としたい。

- 1) 慶応 2 年刊再版初刷には 5 つのタイプが、また、慶応 3 年刊再版 2 刷 (無刊記) には少なくとも 5 つのタイプが、そして、明治 2 年刊再版 3 刷には 3 つのタイプがあることを

確認した。

- 2) 扉の辞書名と刊行年には2種の筆字体がある。1つは慶応2年刊初刷に統一して見られる筆字体で、もう1つは、「慶応3年江戸再版」とあるすべての本に共通する筆字体である。このことは、慶応3年刊再版2刷以降は、改正増補に直接関わった堀越亀之助が述懐しているように(勝俣, 1914b)、個別の版(荒木, 1931)というよりは、むしろすべて同じ板木を用いて蔵田屋清右衛門が刊行したものであることを再確認した。
- 3) 大尾にある「英和对訳辞書大尾」には3種の筆字体がある。それらを手がかりにすれば、巻首の扉や巻末の奥付・刊記の欠損があっても『改正増補』の異版刷の同定が可能となることがわかった。また、499丁表の大尾に異字体が存在するのは、499丁裏の奥付を変更する際に表面も新たに刻成した^{おもて}ことによる変更である可能性を指摘した。

以上、平成14(2002)から約18年間継続してきた、わが国英和辞書の原点というべき堀達之助編『英和对訳袖珍辞書』及び堀達之助編・堀越亀之助増補『改正増補英和对訳袖珍辞書』に関する本研究調査は、一区切りを迎えることとなった。しかし、国内外には、まだ未調査の『英和对訳袖珍辞書』が多数存在する。例えば、滋賀大学図書館には、9本所蔵されているという(鈴木, 1975)。一度調査の依頼を行ったが、その時は不運にも図書館改築工事中のため閲覧することができなかった。その他にも、長崎大学、九州大学、鹿児島県歴史・美術センター黎明館、山口県立山口図書館、福井県文書館、青森市民図書館、津山洋学資料館、愛知県図書館、信州大学繊維学部図書館、立教大学図書館、同志社大学、京都大学など、まだかなり未調査の本が国内だけでも数多く点在している。本研究調査で明らかになって新たな手がかりの再検証のためにも今後も調査を継続していかなければならない。

(謝辞)

これまでの研究調査では、多方面の方々にお世話になった。まず、『袖珍辞書』との出会いのきっかけとなった高知県立牧野植物園及び牧野文庫の方々、特に、小松みち司書(現高知県吾川郡いの町・ギャラリーぼたにか店主)や村上有美司書(現高知県立牧野植物園教育普及課・普及・文庫班長)、里見和彦学芸員には、同文庫所蔵の『袖珍辞書』や『改正増補』の調査にいつも快く協力を頂いた。また、竹中龍範元香川大学教授には、牧野文庫に所蔵されている多数の稀観本の調査に協力をいただき、さらに同氏私家蔵本の閲覧までさせていただいた。高知大学図書館の澤田明美氏と武庫川女子大学図書館の川崎安子氏には、学外所蔵先との橋渡しの労をとっていただいた。そして、最後になったが、この研究調査の端緒を開くきっかけとなった高知大学・学長裁量経費(山本晋平学長、現名誉教授)による「高知の国際化研究プロジェクト」(代表、天羽康夫高知大学名誉教授)のメンバーには不断の励ましと貴重な助言をいただいた。ここに記して感謝する次第である。

参考文献

- 荒木伊兵衛(1931).『日本英語学書志』東京：創元社。
 石井研堂(1927).「明治初期に出版したる英和辞書類」『新旧時代』2月号、第3年・第2冊、42-51。
 大阪女子大学(1962).『大阪女子大学蔵 日本英学資料解題』大阪：大阪女子大学。

- 大阪女子大学附属図書館 (1991).『大阪女子大学蔵 蘭学英学資料選』大阪：大阪女子大学.
- 勝俣銓吉郎 (1914a).「最初の英和对訳字書」『英語青年』第 32 卷、第 1 号 (総号第 440 号)、19.
- 勝俣銓吉郎 (1914b).「最初の英和对訳字書 (其二)」『英語青年』第 32 卷、第 2 号 (総号第 441 号)、56-57.
- 勝俣銓吉郎 (1921).「日本欧化史の片影」『我等』第 3 卷、12 号、49-57.
- 京都市立西京商業高等学校図書館著 (1967).『京都市立西京商業高等学校所蔵洋学関係資料解題 I』京都市立西京商業高等学校、69-70.
- 高知県立牧野植物園編 (1986).『牧野文庫蔵書目録 (和漢・漢籍の部)』高知：高知県立牧野植物園.
- 桜井役 (1937).『日本英語教育史稿』東京：敝文社.
- 杉本つとむ (1980).「早稲田大学図書館蔵『英和对訳袖珍辞書』の一考察」『早稲田大学図書館紀要』第 21 号、17-19.
- 杉本つとむ (1999).『辞書・事典の研究 II』杉本つとむ選集 7、東京：八坂書房.
- 鈴木博 (1975).「洋学辞書二題」『滋賀大國文』第 13 号、49-56.
- 惣郷正明 (1974).「『英和对訳袖珍辞書』考」『英学史研究』第 7 号、163-169.
- 惣郷正明 (1987).『辞書漫歩』東京：東京堂出版.
- 惣郷正明 (1988).「解説」堀達之助編『英和对訳袖珍辞書』東京：秀山社 (複製版)、955-978.
- 高梨健吉 (1978).『文明開化の英語』東京：藤森書店.
- 竹村覚 (1933).『日本英学發達史』東京：研究社.
- 竹中龍範 (1997).「シリーズ・香川大学の貴重図書 11 —英和对訳袖珍辞書」『香川大学附属図書館報 としょかんだより』No. 24、香川大学附属図書館、4-5.
- 竹中龍範 (2007).「解説」香川大学図書館編『西洋語まなび事始め—香川大学図書館一般公開行事・神原文庫資料展—』高松：香川大学図書館、1-61.
- 豊田実 (1930).「英和及び和英辞書の發達」『英文学研究』(日本英文学会)、東京：研究社、第 10 卷、第 1 号、49-77.
- 豊田実 (1939).『日本英学史の研究』東京：岩波書店.
- 町田俊昭 (1981).『改訂版 三代の辞書—英和・和英辞書百年小史—』東京：三省堂.
- 三好彰 (2010a).「『英和对訳袖珍辞書』の書誌的考察」『東日本英学史研究』日本英学史学会東日本支部、第 9 号、34-37.
- 三好彰 (2010b).「袖珍サイズの『英和对訳袖珍辞書』を発見」『日本古書通信』日本古書通信社、第 75 卷、10 号、4-7.
- 村端五郎 (2002a).「牧野文庫所蔵の英和辞書—『英和对訳袖珍辞書』を中心に—」第 7 回「高知における国際化」研究プロジェクト研究交流会研究報告 (於高知県立牧野植物園).
- 村端五郎 (2002b).「牧野富太郎と英和辞書」『高知大学学術研究報告』高知大学、第 51 号、131-154.
- 村端五郎 (2004).「川田文庫『英和对訳袖珍辞書』の遍歴をめぐって」『国際社会文化研究』高知大学人文学部国際社会コミュニケーション学科、第 5 号、49-68.

(2020 年 9 月 23 日受理)